

信行要文 ①

第十三回 法華講夏期講習会 第一期

（平成二十八年五月二十二日）

皆さん、おはようございます。

本年度の法華講夏期講習会第一期に当たり、皆さん方には大変お忙しいなかを御登山なされまして、まことにおめでとうございます。

今、宗門は僧俗一体となって、来たるべき平成三十三年・宗祖日蓮大聖人御聖誕八百年を期し、法華講員八十万人体勢構築へ向かって前進をしております。そうしたなか、時間を割いて御登山し、また信行を鍛錬して、さらに折伏に打って出るということは、まことに結構なことだと思います。

どうぞ、この夏期講習会参加の功德と、その意気込みをもって、これからも御精進いただきたいとお願いいたします。

それでは、テキストを開いてください。

この「信行要文」につきましては、以前からずっと続けてまいりました。『平成新編御書』のページの若いところから順番に要文を抽出いたしまして、講義をしてきたのでありますが、おそらく本年度の夏期講習会で、最後まで拝読できるのではないかと思います。

本日は、まず『上野尼御前御返事』から拝読いたし、勉強したいと思います。

1 上野尼御前御返事

法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り、口に唱ふれば其の口即ち仏なり。譬へば天月の東の山の端に出づれば、其の時即ち水に影の浮かぶが如く、音とひゞきとの同時なるが如し。故に經に云はく「若し法を聞くこと有らん者は一として成仏せずといふこと無けん」云云。文の心は此の經を持つ人は百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人もかけず仏に成ると申す文なり。（御書一五七四〇七行目）

本抄は、弘安三（一二八〇）年十一月十五日、日蓮大聖人様の御年五十九歳の時に、身延においてお認めになられ、南条時光殿の母尼御前に与えられた御消息であります。この御真蹟は既になくなっており、現存はしておりません。

内容は、南条時光殿の母尼御前が、亡父・松野六郎左衛門入道の忌日に御供養をせら

れたのに対して、父子共に成仏疑いなき旨を、蓮華の花と葉が同時なることに寄せて説き、さらに『法華伝記』の「烏竜・遺竜の故事」を引いて、父子一体であれば、子の善根は親に報いられることを御教示あそばされております。

この烏竜と遺竜の故事につきましては、『新編御書』の一五七四ページに詳しく出ております。テキストには載せてありませんので、これについて解りやすく申し上げますと、

「日本から未申の方、すなわち西南の方角に大海を渡っていくと漢土、今で言う中国という国がある。その国では、仏を信じて神を用いない人もあり、また神を信じて仏を用いない人もいるが、日本も初めはそうであったと思われる。

ところで、かの国に烏竜という書家がいた。この人は漢土第一の書家で、日本で言うと小野道風か藤原行成のような名家であった。

烏竜は仏法が大嫌いで、一生涯、経文だけは書かないという願を立てていたが、病の床に就いて、いよいよ臨終という時に、その子供に向かって『おまえは我が跡を継ぐ者であるが、その手跡すなわち書家としての腕前は我れよりも勝れている。このうち、たとえどんなことがあっても、法華経だけは書いてはならない』と言い残した。言い終わるとともに、目や鼻や口などから泉の涌くように血が出て、舌は八つに裂け、身体はずたずたに砕けた。この見苦しい死に方も、集まった親類縁者達は仏教の三悪道を知らないから、これが地獄へ墮ちる先相すなわち、ことが起こる前に出る兆しとは判らなかつた。

この烏竜の子供の遺竜もまた、漢土第一の書家であった。そして、親の遺言を守って、自分も同じく法華経は書かないという願を立てた。

しかるに、国主の司馬という大王は、篤く仏法を敬い、ことに法華経を信仰していたので、国中第一の名筆に法華経を書かせ、生涯の持経にしようと思って、遺竜にこれを命じた。しかし、遺竜は『父の遺言であるから、こればかりはお許し願いたい』と言って断った。

国主は、親の遺言ということなので、よんどころなく、ほかの書家に命じて法華経を書かせたが、出来上がってみると、どうも気に入らない。

そこで、再び遺竜を呼んで『汝は親の遺言だと言うから、経文は書かせないが、ただ法華経八巻の題目だけは、我が命に従って書け』と言われた。

それでも遺竜は断ったので、国主は瞋って『汝は父の遺言だと言うけれども、その父も我が家来ではないか。親への不孝を恐れて書かないならば「違勅の科」すなわち、勅命に反する罪に当てる』と厳命した。

そこで遺竜は、不孝はしたくないけれども、勅命とあれば免れ難いことであるから、仰せの如く題目だけを書いて国主へ差し上げた。そして、家に帰って、すぐに父

の墓へ参り、血の涙を流して言うのには『国主の厳命で仕方なく、ただいま法華經の題目だけを書きました。遺言に背いた不孝の罪は、なんとも申しわけないことである』と嘆いて、三日の間、墓を離れず、食事^たも断って、もはや死ぬばかりとなった。

かくして、三日目の明け方には、肉体は死んだようになり、心は夢を見ているようになった。その時、虚空^{こくう}に一人の天人^{てんにん}が現れた。その姿は帝釈天を絵に描いたようで、無数の眷属が天地に充満していた。

そこで、遺竜が『いかなる天人でいらっしゃいますか』と問うと、天人は次のように言った。『私は、おまえの父の烏竜である。私が人間であった時、外道に執着して仏法^{かたき}を敵とし、ことに法華經を敵として誹謗したために、無間地獄^{むけん}に堕ちてしまった。日々に舌を抜かれること数百回、あるいは死んだり、あるいは生きたり、その苦しみのたびごとに、天を仰ぎ地に伏して、泣けど叫^{さけ}べど、梨^{なし}のつぶて。せめて、どうにかして人間界にこの苦しみを知らせたいと思っても、その便^{たよ}りがない。のみならず、汝が父の遺言であると言って、法華經を書かなかったその時は、その言葉が炎となって我が身を焼き、百千の劍^{つるぎ}となって天から降ってきて、我が身を苦しめた。

汝の言葉が私を苦しめるという不孝は実にはなほだしいことであるが、それも我が遺言を守ったの上のことであるから、自業自得で致し方がないと思っているところに、にわか^{こんじき}に金色まばゆいばかりの御仏^{みほとけ}が一体、この無間地獄に現れて、「たとえ世界に満つるほどの罪惡の衆生でも、ひとたび法華經を聴聞したならば、必ず成仏することは疑いない」と偈文^{げもん}を唱えられると、不思議にも火に水をかけたように、苦しみが少し緩^{ゆる}んだので、思わず合掌して、仏に「あなたは、なんという仏様ですか」と問うと、仏様は「我れはこれ、汝の子の遺竜が今、書いたところの法華經の題目の、六十四字のなかの妙の一字である」と仰せられた。

法華經の題目は、例えば「妙法蓮華經卷第一」というように題目が八字で、法華經が八卷であるから「八八六十四の仏」となって、満月のように地獄の闇を照らしたから、無間地獄の暗闇は、そのまま光明世界となった上、極苦^{ごく}最惡の無間地獄は「当位即妙、本有不改」とて、さながら常寂光の都になったのである。

それで、我れも地獄の罪人達も皆、蓮^{はちす}の上の仏と成って、ただいま天上界の都率^{とそつ}の内院^{のぼ}に上ったのであるが、この次第を、まずもって汝に告げるのである』と言ったのであった。

この父・烏竜の返答に対し、遺竜は『たしかに八卷の題目は私が書いたのであるが、心から信じて書いたものではないのに、どうして父を助けることになったのであろうか』と詰問した。

すると、父は『汝は解らぬことを言う。汝の手は我が手、汝の身体は我が身体、汝が書いた文字は我が書いた文字である。汝は心から法華經を信じていないが、真劍に

題目を書いたのだから、その功德で父は、かように救われたのである。

例えば、子供がいたずらをして火をつければ、焼こうという心がなくとも、火は物を焼くようなものである。法華経もまた同じで、ことのほか信じたならば、必ず成仏する。そうであるから、この道理を^{わきま}弁えて、法華経を誹謗してはならない。

ただし、我らは在家の身であり、一向に仏法を知らないのであるから、今まで言ったことがことさらに大罪であっても、^{さんげ}懺悔しやすいのである』と、ねんごろに諭した。

以上のことを国主の司馬に申し上げると、国主は大いに喜ばれて『それで我が^が願も^{こうけん}効験があった』と仰せられ、その後、遺竜はますます御恩を^{こうむ}被り、この国の人も残らず、法華経を信ずるようになった」

こういうことが、この御書に出ているのであります。

その続きには、しかるに「故五郎殿」すなわち南条五郎殿と、「故入道殿」すなわち松野六郎左衛門殿の二人は、尼御前にとっては子供と親である。つまり、南条時光殿のお母さんは松野六郎左衛門の娘であり、「故五郎殿」というのは南条時光殿の弟で、この方は若くして亡くなりました。この親と子、父子は一体であるから、法華経の信心によって、今こそ入道殿は都率の内院へおいでになったであろうと述べられ、最後に、この由を^{よし}伯耆房日興から読み聞かせてもらうがよいと、テキストに挙げた御文のあとこのころで仰せられているのであります。

つまり、法華経の功德について、ここの例のように、子供が何も知らないで勤行をし、お題目を唱える。けれども、その功德はまことに大きい、お題目の力は広大無辺であるということをおっしゃっておられるのであります。

さらに、テキストに載せた御文の前には、次のような御文があります。簡単に申しますと、

「妙法蓮華経は蓮華^{たと}に譬えられている。天上界では^{まかまんだらけ}摩訶曼陀羅華すなわち、大きな曼陀羅華のことで、これは大白蓮華と訳します。天上界ではこの摩訶曼陀羅華、人間界では桜の花、これらはめでたい花ではあるが、これらの花は法華経の譬えとして、仏は取り上げられていない。すべての花のなかで、とりわけ、この蓮華の花を法華経に譬えられたことは、理由のあることである。

花には、あるいは『前花後菓』^{さき}と^みいって、花が前に咲き、菓は後になるものもあれば、あるいは『前菓後花』^みと^{あと}いって、菓が前になり、花は後に咲くもの、あるいは『一花多菓』のもの、つまり一つの花に菓がたくさんなるもの、あるいは『多花一菓』のもの、これはその反対です。あるいは『無花有菓』のものと、そういったものが色々にあるけれども、蓮華だけは花と菓が同時であり、いわゆる『因果俱時』^{くじ}である。

一切経の功德は、先に善根を積んで、のちに仏に成ると説く。したがって、一切経の功德では、成仏は定まらないのである」

と、大聖人様は「因果俱時」の功德について、おっしゃっているのであります。

この因果俱時とは、我々の一念の生命に因と果が具足し、先後の別がないことを言います。一般には、原因と結果は、同時には起こりえず、いかに微少であったとしても、因と果の間には時間的な差異が必ずあるのでありまして、これはまさしく現象の上の出来事であります。

しかし、現象における差別の相の根底にある、万法の円融相即の理によれば、因は果を具し、果は因に即して因果一体であり、因果不思議であって、因と果を一瞬も切り離すことはできず、故に因果俱時であるというのです。

したがって、大聖人様は『当体義抄』に、

「至理は名無し、聖人理を觀じて万物に名を付くる時、因果俱時・不思議のこれ一法之有り。之を名づけて妙法蓮華なと為す。此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足してけつげん闕減無し。之を修行する者は仏因仏果同時に之を得るなり。聖人此の法を師と為して修行覚道したまへば、妙因妙果俱時に感得し給ふ。故に妙覚果満の如来と成り給ふなり」(御書 六九五頁)

と、甚深の御教示をあそばされているのであります。

この「因果俱時・不思議の一法」というのは、仏因と仏果を同時にそな具えた不思議な法ということで、まさに久遠元初に凡夫即極の御本仏が修行し即座開悟された、この「修行」というのが本因で、「即座開悟」が本果ということになります。この本因本果即座開悟された妙法蓮華經の一法を言います。この妙法蓮華經の一法には十界三千の諸法が円満に具わる故に、これを修行する者は「俱時」に、すなわち即座に成仏の果徳が得られる、つまり悟りを開くことができるのです。

日蓮大聖人様は、この「因果俱時・不思議の一法」たる妙法蓮華經を、末法において三大秘法の南無妙法蓮華經として顕されたのであります。

さて、先の「花葉同時」の御指南のあと、テキストに載せた御文が続くのでありまして、まず「法華經と申すは手に取ればそ其の手やがて仏に成り、口に唱ふれば其の口即ち仏なり。譬えへば天月の東の山の端に出づれば、其の時即ち水に影の浮かぶが如く、音とひびきとの同時なるが如し」とお示しであります。

つまり「法華經は、手に取れば、その手が直ちに仏に成り、口に唱えれば、その口がそのまま仏と成る。例えば、天の月が東の山の端に出れば、その影がその時、直ちに水に浮かぶように、また音と響きとが同時であるようなものである」とおっしゃっております。

すなわち、法華經の功德は爾前經と異なり、「法華經は、手に取れば、その手が直ちに仏に成り、口に唱えれば、その口がそのまま仏と成る」と仰せの如く、法華經の功德がいかに勝れているかということをおっしゃっているのであります。

そもそも、法華經以前の諸經におきましては、改転かいてんの成仏と言ひまして、悪人は善人に身を変じ、歴劫修行りゃっこうという長期の修行により三十二相・八十種好を具えて、仏に成ると説かれているのです。また女人について、諸々の大乘經には成仏往生おうじょうを許すようでありましたが、女人の当体のままで成仏できるのではなく改転の成仏、すなわち女人は長い間掛かって修行し、男子と変じて成仏すると説かれているのであります。

したがって、法華經に明かすところの十界互具一念三千の即身成仏ではなく、爾前經うみょうは有名無実の成仏往生に過ぎないのであります。

されば、大聖人様は『大田殿女房御返事』に、

「釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹菩薩・天台・妙樂・伝教大師は、即身成仏は法華經に限るとを思ぼしめされて候ぞ。我が弟子等は此の事を思をもひ出にせさせ給へ」
(同 一四七二頁)

と、法華經では歴劫修行によらず、妙法蓮華經の偉大な功德力によって、凡夫の身そのまの姿で成仏を得る、すなわち即身成仏すると説かれているのであります。

その例として、法華經の提婆達多品では、八歳の竜女の即身成仏が明かされております。すなわち、伝教大師の『法華秀句』に、

「能化所化とも俱に歴劫無し、妙法の經力をもつ以て即身に成仏す」

と示されております。

また、大聖人様は『一念三千法門』に、

「凡そ此の經は悪人・女人・二乗・闍提せんたいを簡えらばず。故に皆成仏道かいとも云ひ、又平等びょうどう大慧とも云ふ。善惡不二・邪正一如と聞く処ところにやがて内証成仏す。故に即身成仏と申し、一生に証得しょうとくするが故に一生妙覺と云ふ。義を知らざる人なれども唱ふれば唯ただ仏と仏と悦び給ふ。『我即歡喜諸仏亦然』云云」(御書 一一〇頁)

と仰せられておりますように、法華經の功德は、まさに「皆成仏道」すなわち、たとえ悪人であろうと罪障の深い人であろうと、どんな人でもすべて、必ず成仏するのであります。

さらに『開目抄』には、

「諸經は智者猶なお仏にならず。此の經は愚人も仏因を種ううべし。『不求解脫・解脫自至』等と云云」(同 五七四頁)

とおっしゃっております。

「不求解脫・解脫自至」というのは「解脫を求めざれども、解脫自ずから至る」と読みます。これは涅槃經の文でありますけれども、正法を護持する者は、たとえ成仏を求めずとも、おのずから成仏の境地を会得することができると説かれております。

つまり、先程も言った通り、幼い子供が南無妙法蓮華經の意味も解らなくとも、一生懸命に唱えることによって成仏する。それと同じように、我々も御本尊様に向かってし

っかりお題目を唱えていけば、どんな人でも必ず成仏をするとおっしゃっているのです。

これは、法華經しんげほん信解品の、

「無上ほうじゆ宝聚 不求自得おのずか（無上の宝聚 求めざるに 自ら得たり）」（法華經 一九九
ページ）

の文と同意で、末法こんじ今時では、三大秘法の御本尊を受持する者が、求めずして即身成仏の境地を得ること、大功德を得ることを言っているのであります。

さらに『当体義抄』を拝しますと、

「正直に方便を捨てただ但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱・業・苦の
三道、法身・般若・解脱ほっしん げだつの三徳と転じて、三観・三諦即一心に顕はれ、其の人の所住
の処は常じょうじやくこうど寂光土なり。能居・所居、身土・色心、俱体俱用の無作三身、本門寿量の
当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等の中の事なり。是即ち法華の当体、自在じんりき神力の
顕はす所のくのう功能なり。敢へて之を疑ふべからず、之を疑ふべからず」（御書 六九四
ページ）

と仰せであります。

この御文は、煩惱・業・苦の三道即、法身・般若・解脱の三徳であることを顕されているものであります。生死の迷いを形作っている煩惱・業・苦の三道も、妙法蓮華經を受持信行することによって、仏様の具える徳相である法身・般若・解脱の三徳に開かれ、仏道を成ずることができる、との仰せであります。

この「三道」の、初めの「煩惱」とは、無明、貪欲、瞋恚などを指します。この煩惱が因となって、様々な善悪の「業」を作り、さらにその業が因となって「苦」、様々な苦しみを受けるのです。しかも、ほとんどの衆生は、この苦から抜け出すことなく、また元の煩惱に戻ってしまい、煩惱・業・苦の三つをグルグル繰り返すばかりで、ここから抜け出すことができないのです。これを「三輪」と言います。

この苦しみの境界を打ち破っていくのが法華經であります。これは、どのように打ち破っていくかという、グルグル回っている煩惱・業・苦の三つの苦しみを、法身・般若・解脱の三徳に転ずるのです。お題目の力は、煩惱・業・苦の苦しみから法身・般若・解脱の三徳に転ずる、廣大無辺なる功德力を具えているのであります。

ただしこれも、我々の「信」がなければできません。理屈の上では、仏様はそれだけのお力を持っていらっしゃるけれども、それを我が身に得ていくためには、我々に信心がなければならぬのです。

法身・般若・解脱の三徳のうち「法身」というのは仏様が証得せられたところの真理のことで、また「般若」は真理を悟る智慧のことです。そして「解脱」は、法身・般若の二徳が一つになって、生死の苦しみから脱却した状態を言います。

だから、煩惱・業・苦の三道が、お題目を唱えることによって、法身・般若・解脱の

三徳に転じていくと、大聖人様は先程の『当体義抄』におっしゃっているのであります。

これは、一念三千の理法によれば、三道と三徳とは全部、衆生の一念に具わっており、本来、一体不二のものなのです。つまり、三道によって三徳があるのであり、『法華玄義』に、

「法身に迷うて苦道と為す。苦道を離れて別に法身有るに^{あら}不^なず」（学林版玄義会本上八五〇頁）

とあるように、三道を離れて三徳はなく、三道の本体は三徳なのですが、現実に三徳と現れないだけであります。故に、三道を断じ尽くして初めて三徳を現ずるのではなく、妙法に^あ値い、その御本尊を縁として三道を転じるのです。ここが大事なところですが、けっして三道を滅するものではありません。あくまで煩惱・業・苦の三道を転じて、法身・般若・解脱の三徳を成ずることができると説かれるのであります。

だれもがみんな煩惱・業・苦を持っていることは、逆に言えば、成仏の素因を内在していると言えるのです。だから、お題目の力というのはすごいのです。その内在している、悪の根源たる煩惱・業・苦の三道が、お題目を唱えることによって法身・般若・解脱の三徳という、仏様の^{とくゆう}徳用に転ずることができ。ここに三道即三徳という意味が挿せられるのであります。

このように、歴劫修行を説く爾前権経と異なり、妙法には即身成仏の功德が存していることを、ただいまのテキストの御文では「法華経は、手に取れば、その手が直ちに仏に成り、口に唱えれば、その口がそのまま仏と成る」と、有り難い御教示を賜っているのであります。

当抄では「法華経」の功德についておっしゃっておりますが、これを現時に約して言うならば、南無妙法蓮華経の功德であります。

つまり、法華経の功德は廣大無辺にして、爾前経の如く段階的に成仏に至るのではなく、花菓同時の蓮華のように、凡夫は凡夫のままで、その身そのまま即身成仏するのであります。

これは、いかなる人でも、妙法を唱えて成仏するという事です。これが、皆さん方もよく御存じの提婆達多の悪人成仏であり、童女の女人成仏でありまして、それまで絶対に成仏できないと言われた人達が、妙法の功德によって成仏をする姿を、大聖人様はこのようにおっしゃっているのであります。

続いて「故に経に云はく『若し法を聞くこと有らん者は^{ひとり}一として成仏せずといふこと無けん』云云。文の心は此の経を持つ人は百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人もかけず仏に成ると申す文なり」と仰せになっております。

初めに示される「若し法を聞くこと有らん者は一として成仏せずといふこと無けん」というのは法華経方便品の御文で、

「にやく うもんぼうしや 若有聞法者 無一不成仏」(法華經 一一八ぶつ)

という文を訓読したものであります。この御文は「皆成仏道」すなわち、妙法を信受した衆生はすべて成仏するという語と同義であります。

しかして、この方便品の御文について、大聖人様は「文の心は、この経を持つ人は、百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人も欠けずに仏に成るといふ文である」とおっしゃっております。

されば、大聖人様は『妙一尼御前御消息』に、

「いまだ昔より開きか見みず、冬の秋とかへれる事を。いまだきかず、法華経を信ずる人の凡夫となる事を。経文には『にやく うもんぼうしや 若有聞法者無一不成仏』ととかれて候」(御書 八三二ぶつ)

と、大御本尊様を信じて成仏した人が、地獄に墮ちるようなことは絶対にない、とおっしゃって、南無妙法蓮華経と唱える功德が、いかに大きいかを仰せであります。

さらに御書を挙げますと、『千日尼御返事』には、

「法華経に云はく『ひとり 若し法を聞く者有らば一として成仏せざる事無し』云云。文字は十字にて候へども法華経を一句よみまいらせ候へども、釈迦如来のしょうぎょう 一代聖教をのこりなく読むにて候なるぞ」(同 一四七四ぶつ)

と仰せであります。文中の「文字は十字」というのは、ここには「若し法を聞く者有らば一として成仏せざる事無し」と訓読で引かれてありますが、その元の真読は「若有聞法者 無一不成仏」と十文字ですから、「文字は十字」とおっしゃっているのです。

つまり、法華経の文字はわずか十字であるけれども、この法華経の一句を読むところの功德は、釈尊の一代聖教を残すところなく読むのと同じであるということで、この妙法蓮華経の功德が、いかに大きいかということをおっしゃっているのであります。

さらに『上野尼御前御返事』には、

「にやく うもんぼうしや むいち ふじょうぶつ 若有聞法者無一不成仏と申して、大地は指さ外ばはづるとも、日月は地に墮ち給ふとも、しを潮は満みち干ひぬ世はありとも、花は夏なつにならずとも、南無妙法蓮華経と申す女人の、思をもう子にあわずという事はなしととかれて候ぞ」(同 一五五三ぶつ)

と、これも法華経の功德について仰せであります。

また『念仏無間地獄抄』には、

「一代聖教の大王、三世諸仏の本懐たる法華の文には『若有聞法者、無一不成仏』と説き給へり。善導は法華経を行ぜん者は、千人に一人も得道の者有るべからずと定む。何れの説いずに付くべきか(中略)多宝如来の皆是かい ぜ真実の証明の御言み ことば妄語と成るか。十方諸仏の上じょう し ぼんてん至梵天のこうちようぜつ広長舌も破られ給ひぬ」(同 四一ぶつ)

とおっしゃっております。

これは、念仏の善導は法華経に対して「千中無一」千人のなかに一人も成仏をしない

と言っているけれども、そちらへ付くのか、それとも法華経の「若有聞法者、無一不成仏」の御文に付くのかということで、我々は、このことをよくよく知らなければならないのであります。

次に『聖愚問答抄』には、

「此の妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功德として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし。譬へば網の目無量なれども、一つの大綱を引くに動かざる目もなく、衣の糸筋あまた巨多なれども、一角を取るに糸筋いっかくとして来たらざることなきが如し」（同 四〇八シ）

と仰せになっております。この御文は、皆さんもよく知っておられるかと思しますので、あ敢えて説明しませんが、まさに法華経の功德はこれほど尊いのであります。

さらに『経王殿御返事』には、

「南無妙法蓮華経はししく師子吼の如し。いかなる病障さはりをなすべきや。鬼子母神・十羅刹女せつによ、法華経の題目を持つものを守護すべしと見えたり。さいはいは愛染幸の如く、福は毘沙門びしゃもんの如くなるべし。いかなる処にて遊び戯たはぶるともつゝがあるべからず。遊悉行して畏れ無きこと師子王の如くなるべし。十羅刹女の中にもこうたいによ皐諦女の守護ふかゝるべきなり。

但し御信心によるべし。つるぎたなだんども、すゝま進ざる人のためには用ふる事なし。法華経の剣は信心のけなげなる人こそ用ふる事なれ。鬼に鉄かな棒ぼうたるべし」（同 六八五シ）

と仰せになっております。

この御文も、お寺の御講の時に御住職から、よく聞かれていることと思えます。まさに信心がけなげ健ごうじょう気である、強盛であるということが大切なのであります。

ここに「つるぎなたんども、すゝま進ざる人のためには用ふる事なし。法華経の剣は信心のけなげなる人こそ用ふる事なれ」とあるように、信心をしっかりとしていかなければならない。そして、信心をしっかりとしていけば「鬼にかなぼうたるべし」とおっしゃっているのであります。

次に『法華初心成仏抄』には、

「口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ずい頭はれ給ふ。梵王・帝釈の仏性はよばれて我等を守り給ふ。仏菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ」（同 一三二一シ）と、我々が南無妙法蓮華経と唱えるなかで、このような現証が必ず頭れてくるとおっしゃっております。

また『乙御前御消息』には、

「抑そもそも一人の盲目をあけて候はん功德すら申すばかりなし。況んや日本国の一切衆生の眼まなこをあけて候はん功德をや。何に況んや一閻浮提いか四天下の人の眼のいしいゐたるをいあ

けて候はんをや。法華經の第四に云はく『仏滅度の後に能く其の義を解せんは、是 諸
の天人世間の眼なり』等云云」(同 八九八^ぎ)

と、まさに大聖人様の仏法の功德は、一切衆生の盲目を開ける功德があるとおっしゃっ
ているのであります。

次に『妙密上人御消息』には、

「金はやけば 弥 色まさり、 劍 はとげば 弥利くなる。法華經の功德はほむれば 弥功
徳まさる」(同 九六九^ぎ)

と仰せであります。つまり、劍は、焼きを入れると言いますように、火に入れ、水に入れ
て、何回も何回も打ち鍛えて、あの日本刀の名刀が出来てくるわけであります。だから、ま
さに「法華經の功德はほむれば 弥功德まさる」とあるように、私達がこの御本尊
様が絶対であると信じ、無心に南無妙法蓮華經と唱えれば、功德はさらに増していく、
ということを示されているのであります。

以上、南無妙法蓮華經と唱える功德について、かくの如く多くの御文において詳しく
御教示あそばされているのであります。このほかにも、たくさんの御文がありますけれど
も、このことをよくよく知って、これからもしっかりとお題目を唱えていくというこ
とが肝心であると思います。

次の御文に移ります。

2 上野尼御前御返事

小児の火を放つに心にあらざれども物を焼くが如し。法華經も亦かくの如し。存の外
に信を成せば必ず仏になる。又其の義を知りて謗ずる事無かれ。(御書一五七六^ぎ一
〇行目)

この御文意は「子供が火をつけると、焼く気はなくとも物を焼いてしまう。法華經も
またそれと同じで、思いのほか信じたならば、必ず仏に成る。だからまた、その義を
知って、謗ることがあってはならない」との仰せであります。

ここに「存の外に信を成せば必ず仏になる」と仰せのように、我々の成仏・不成仏は、
我々の知恵・才覚で決まるのではないのです。つまり知恵・才覚というのは様々な御法
門を知っていたとしても、その根本となる信心がなければ、我々は成仏できない。理屈
ばかりを言っている信心はだめだ、ということです。やはり、信心のいかんによって、
我々の成仏は決まるのだと、このようにおっしゃっているのであります。

同様の御文としては『四信五品抄』に、

「問ふ、其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱へて解義の功德を具するや不や。

答ふ、小児乳を含むに其の味を知らずとも自然に身を益す。耆婆が妙薬誰か弁へて之を服せん。水心無けれども火を消し火物を焼く、豈覚り有らんや」（御書 一一一四頁）

と仰せです。

この「耆婆」というのは釈尊在世当時の名医でありまして、阿闍世王の父である頻婆娑羅王などの病を治した人です。また、仏教を深く信じて、阿闍世王に大臣として仕えている時に、その阿闍世王が父を殺し、母の韋提希夫人を殺そうとしたのを諫めました。そして、中国古代の伝説的名医である扁鵲と共に、世に稀な名医として知られている方です。

つまり、名医の耆婆が調合する薬は、患者のだけれども、その処方を得て服するわけではないけれども、耆婆を信じてその薬を飲めば、病気は必ず治ると言われていたのです。

また、赤ん坊が母の乳を飲む時に、その成分などを知らなくとも、飲めば自然に身を養う如くであるとして、乳・薬・水・火の四つの例を挙げて、妙法を信ずる者の徳を譬えられているのであります。

これは皆さん方も重々知っておられることと思いますが、そもそも宗教・仏教から信心・信仰という、つまり拝むという行為を排除してしまえば、それは宗教でもなければ仏教でもなく、単なる理論に過ぎません。単なる理論では、絶対に幸せにはなれないということです。

ですから、法華経譬喩品にも、

「舍利弗 尚此の経に於ては 信を以て入ることを得たり 況んや余の声聞をや 其の余の声聞も 仏語を信ずるが故に 此の経に随順す 己が智分に非ず」（法華経 一七四頁）

と、「智慧第一」と言われた舍利弗でさえも、自らの智慧によってではなくして、仏様の正しい教えを信ずることによって、初めて悟りを得ることができたのであると説かれているのです。つまり、信こそが仏道修行の要諦であり、一切衆生はことごとく、信をもって成仏することができるのであります。

まして、末法の荒凡夫である、我ら本未有善、三毒強盛の衆生が、己れの知恵や才覚だけで成仏することは、絶対にありません。

そもそも、この「三毒」というのは善根を毒する煩惱で、いわゆる貪瞋癡の三種のことです。「貪」とは貪欲・貪愛など、貪むることです。次の「瞋」とは瞋ること、「癡」とは癡かなことを言います。

『大智度論』卷三十一には、

「三毒は一切の煩惱の根本と為す」

とあり、この貪瞋癡の三毒が諸々の悪を生ずる煩惱の根本であるとあります。

また『大乘義章』巻五には、

「三毒は一切の煩惱を撰し、すべての煩惱が衆生を害するのは毒蛇の如く、また毒竜の如きである故に毒と名づける」(取意)

と、この貪瞋癡の三毒は毒蛇あるいは毒竜と同じだと言って、だから「毒」と名づけるのだと記されています。

しかも、この三毒が充満した時には、個人だけではなくして、国をも不幸にしてしまう「小の三災」が起こるのです。このことについては『曾谷殿御返事』に、

「滅劫の時は小の三災をこる。ゆはゆる飢渴・疫病・合戦なり。飢渴は大貪よりをこり、やくびやうはぐちよりをこり、合戦は瞋恚よりをこる」(御書 一三八六頁)

と仰せであります。

様々な災いがありますがけれども、貪瞋癡の三毒がすべての原因になっており、すなわち人々が飢えるのは食欲が原因であり、疫病は愚癡から起こっている。そして「合戦」すなわち争いは瞋恚から起こっている、とお示しであります。

したがって『四信五品抄』に、

「仏正しく戒定の二法を制止して一向に慧の一分に限る。慧又堪へざれば信を以て慧に代ふ。信の一字を詮と為す。不信は一闡提謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり」(同 一一一頁)

と仰せられて、一往、仏法では智慧によって仏道を成ずるといたしますが、再往は以信代慧、すなわち「信を以て慧に代ふ」と言われるように、信心をもって仏道の本因とするのであります。つまり、信心のなかに仏の説かれる一切の修行と功德が具わるということです。

この戒定慧の三学は、仏道を修行する者が必ず修学しなければならない三つの事柄であります。「戒」は禁戒で、身口意の三業の悪を止め、非を防いで善を修すること。それから「定」は禅定で、心を一所に定めて雑念を払い、安定した境地に立つこと。そして「慧」は智慧でありまして、煩惱を断じて真理を照らし顕すことであります。また、この三学相互の関係は、戒によって定を助け、定によって慧を發し、慧によって仏道を証得すると説かれております。

しかし、下根下機の末法の衆生は、三学をそのまま修得することは不可能です。よって、成仏を期するためには「慧又堪へざれば信を以て慧に代ふ」と仰せのように、以信代慧すなわち、信をもって智慧に代えるのであります。

よって、たとえ智慧のない、貪瞋癡の三毒強盛の末法の荒凡夫であったとしても、御本尊を信じ、受持すれば、確固たる幸福境界を築く智慧を得て、即身成仏することができるのです。

したがって『御義口伝』には、

「信は智慧の因にして名字即なり。信の外に解無く、解の外に信無し。信の一字を以て妙覚の種子と定めたり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と信受領納する故に無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり。信は智慧の種なり、不信は墮獄の因なり」（同一七三八頁）

と仰せられているのであります。

まさに「不信は墮獄の因」であります。我々から信を取ってしまえば、あるいはその信が間違っただけのものであったとすれば、これは大謗法となって、結局、地獄に墮ちる原因になるのであります。

さて、ただいまの御書に「信は智慧の因にして名字即なり」とありますが、この「名字即」とは、理即・名字即・觀行即・相似即・分身即・究竟即という六即のなかの名字即のことではありますが、この六即は天台が『摩訶止観』で立てた法門であり、法華円教を修行する菩薩の、六種の修行位のことです。

六即の「六」とは、差別を意味すると言われており、行者が「己れは仏と均しい」と思って増上慢になることを戒めているのであります。また「即」は平等を意味し、行者が究竟即の仏にも通じることを示して、卑屈の思いで修行をやめないように戒めるのであります。つまり六即とは、差別にして平等、平等にして差別を顕しているのであります。

その六即のうち、最初の理即は、まだ正法を聞かず、仏法に無知な迷いの凡夫で、理の上では仏に成ることができるという位です。

二番目の名字即は、言葉や文章を通して、我が身が元々仏であり、一切法は皆、仏法であると知る位であります。実際には、この位から成仏が始まるのです。つまり理即では、ただ可能性を秘めているだけですから、名字即ではそれが一步転じて、初めて南無妙法蓮華經の題目を唱えるのであり、この名字を唱えるところから成仏が始まるわけです。ですから、一番大事なのが、この名字即の位であります。

三番目は觀行即と言いまして、仏道修行を実践して、我が心のなかに仏を觀じて修行をしていくということでもあります。言うならば、仏道修行のなかでも、言行一致の修行に励む位であります。

四番目は相似即であります。三惑のなかの見思惑と塵沙惑を断じ尽くして六根清淨の徳を得る位で、仏の悟りに相似する、つまり似ている位だと言います。

五番目の分真即は、三惑の一つである無明惑のなか、元品の無明のみを残して、すべての迷いを断じ尽くし、仏性を分々に顕現していく位であります。

そして最後、六番目が究竟即でありまして、元品の無明を断じて、仏性を余すところなく顕現した、極聖の妙覚の位を言うのであります。

この六即の位を、末法下種益・三大秘法の仏法に配当すると、いまだ三大秘法の御本尊を受持せず、煩惱あかの垢おほに厚く覆むわれて、我が身に無作本有むさほんぬの仏界みょうぶくが冥伏みょうぶくしている状態の人が理即であります。

次に、初めて御本尊を信受した人が名字即であり、修行に励み、御本尊に対して唱題・読経の功德を積む人が観行即です。さらに、三惑や三障四魔などを克服していく人が相似即で、化他行に励み、妙法弘通に精進する人が分真即、そして我が身に無作本有の仏界を顕現し、不変ふえ・不壊ふえの境界を築いた人が究竟即となります。

仏教の定説に従えば、このようになるわけでありませけれども、それではどの形において成仏をするかということ、結局、まさに三大秘法の仏法、南無妙法蓮華経の題目を唱えた時、つまり名字即のところから直ちに即身成仏することができるのであります。これが、ほかの教えとは違うところで、まさしく法華円教の至極の法門であります。

ですから、妙法を唱える凡夫の当体、本有のままを極理とするのが法華経でありますから、どんな人でも、この妙法蓮華経の名字を唱える、つまり南無妙法蓮華経と唱えることによって即身成仏できるとおっしゃっているのです。

また、この『御義口伝』の御文のなかに「無上宝聚不求自得」とありましたが、これは法華経信解品の文で、

「無上の宝聚 求めざるにおのずか自ら得たり」（法華経 一九九ぎ）と読むのであります。

これは、摩訶迦葉かしょうなどの四大声聞が釈尊の「開三頭一」の説法、これは「三を開いて一を顕す」と読み、「三」は声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の三乗、「一」は一仏乗のことで、仏様がこの世に出現した目的は、声聞・縁覚・菩薩の三乗の法を説くことではなく、一切衆生皆成仏道の法である一仏乗、すなわち妙法蓮華経を説くにあることを示されたものであります。その開三頭一りょうげの説法を領解したことを、歡喜をもって述べたのが「無上の宝聚求めざるに自ら得たり」という言葉であります。

このなかの「宝聚」とは、三世諸仏の万行万善の功德・善根を具足した南無妙法蓮華経のことであり、その功德は信によって、求めずとも得ることができると仰せられているのであります。まさにこれは、成仏得道のためには信こそが肝要であるとおっしゃっているのであります。

さて、三番目の『三大秘法抄』に入りますと長くなりますが、少し時間が残っていますので、途中まででも拝読することといたします。

3 三大秘法稟承事

法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給ひて候は、此の三大秘法を含めたる経にて渡ら

せ給へばなり。秘すべし秘すべし。(御書一五九五^〆一八行目)

この御文は、三大秘法こそが法華經の根源の法体であることを顕しているのではありませんが、御承知の通り、三大秘法というのは本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目であります。これは、まさしく日蓮大聖人の御出世の本懐であり、そのことをお示しになっておられます。

そもそも仏法においては、仏道を修行する者が必ず修学しなければならない基本的なものとして戒定慧の三学があります。戒は善を修め、悪を防ぐこと、定は心身の乱れを静め、安定した境地に立つこと、慧は真理を証得する智慧であります。

大聖人様は『御義口伝』のなかで、端的に、

「戒定慧の三学、寿量品の事の三大秘法是なり」(御書 一七七三^〆)

と仰せになり、戒定慧の三学は、末法においては三大秘法であると御教示あそばされているのであります。

総本山第二十六世日寛上人が『依義判文抄』に、三大秘法の開合について、

「問う、若し爾らば三大秘法開合の相如何。

答う、実には是れ一大秘法なり。一大秘法とは即ち本門の本尊なり。此の本尊所住の処を名づけて本門の戒壇と為し、此の本尊を信じて妙法を唱うるを名づけて本門の題目と為すなり。故に分ちて三大秘法と為すなり。又本尊に人有り法有り、戒壇に義有り事有り、題目に信有り行有り、故に開して六義と成る。此の六義散じて八万宝蔵と成る。例せば高僧伝に『一心は万法の総体なり。分ちて戒定慧と為し、開して六度と為り、散じて万行と為る』と云うが如し。当に知るべし、本尊は万法の総体なり、故に之れを合する則んば八万宝蔵は但六義と成る。亦此の六義を合すれば則ち但三大秘法と成り、亦三大秘法を合すれば則ち但一大秘法の本門の本尊と成るなり。故に本門戒壇の本尊を亦是三大秘法総在の本尊と名づくるなり」(六卷抄 八二^〆)と、甚深の御教示をあそばされております。

すなわち、三大秘法を合すれば一大秘法となる、これが根本です。そして、一大秘法は三大秘法に開かれ、この三大秘法をさらに開くと六大秘法となる。つまり、三大秘法のそれぞれに二義が存しているのでありまして、本尊には人の本尊と法の本尊の二つ、戒壇には義の戒壇と事の戒壇の二つ、題目には信の題目と行の題目の二つ、合わせて六義となり、さらに、この六大秘法が八万宝蔵に開かれるということです。

ですから、仏法の根本中の根本は一大秘法たる本門戒壇の大御本尊に帰すると、御指南あそばされているのであります。つまり、三大秘法の根本は、あくまで本門戒壇の大御本尊であり、一切衆生を成仏に導く根本の本尊となるのであります。

そこで今、三大秘法についての文証を挙げますと、まず『四条金吾殿御返事』には、

「今日蓮が弘通する法門はせばきようなれどもはなはだふかし。其の故は彼の天台伝教等の所弘の法よりは一重立ち入りたる故なり。本門寿量品の三大事とは是なり」
(御書 五九七㊟)

とおっしゃっております。ここに「本門寿量品の三大事」とおっしゃっている意味は三大秘法のことでありまして、『三大秘法抄』にも、

「此の三大秘法は二千余年の当初、地涌千界の上首として、日蓮慥かに教主大覚世尊より口決せし相承なり。今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に介爾計りの相違なき、色も替はらぬ寿量品の事の三大事なり」(同 一五九五㊟)

と、三大秘法とは「寿量品の事の三大事」であることを示されているのであります。

また『義浄房御書』には、

「寿量品の自我偈に云はく『一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず』云云。日蓮が己心の仏果を此の文に依って顕はすなり。其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此の経文なり、秘すべし秘すべし」(同 六六九㊟)

と、このように甚深の御指南があります。

さらに『法華行者値難事』には、

「竜樹・天親は共に千部の論師なり。但権大乘を申べて法華経をば心に存して口に吐きたまはず此に口伝天台・伝教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華経の五字と、之を残したまふ」(同 七二〇㊟)

と示され、ここに「本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華経の五字」すなわち、三大秘法については、天台も伝教も述べなかつたとおっしゃっております。

そして『法華取要抄』には、

「問うて云はく、如来滅後二千余年に竜樹・天親・天台・伝教の残したまへる所の秘法何物ぞや。答へて曰く、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり」(同 七三六㊟)

と説かれております。

また『報恩抄』には、

「問うて云はく、天台伝教の弘通し給はざる正法ありや。答ふ、有り。求めて云はく、何物ぞや。答へて云はく、三つあり、末法のために仏留め置き給ふ。迦葉・阿難等、馬鳴・竜樹等、天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求めて云はく、其の形貌如何。答へて云はく、一つには日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦・多宝、外の諸仏並びに上行等の四菩薩脇士となるべし。二つには本門の戒壇。三つには日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をきはらず一同に他事をすて、南無妙法蓮華経と唱ふべし」(同 一〇三六㊟)

と仰せになっております。

このなかに「教主釈尊」とおっしゃっておりますが、この言葉には、藏教の釈尊、通

教の釈尊、別教の釈尊、法華経迹門の釈尊、法華経本門の釈尊、本門寿量品文底の釈尊というように、六種の釈尊が存するのです。そして、この文で大聖人様が「教主釈尊」とおっしゃっている意味は、まさしく法華経本門寿量品文底下種の教主釈尊、つまり末法下種の御本仏である宗祖日蓮大聖人様のことをお示しなのであります。だから、ここに「教主釈尊」とあるからといって、インド出現のお釈迦様のことだと思ってしまうのは大きな間違いであります。

さらに『御義口伝』には、

「此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱これなり。如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作むさの三身なり。今日蓮等の類たぐいの意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那なり。されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華経と云ふなり。寿量品の事の三大事とは是なり」(同 一七六五)

と仰せであります。

先程も言いました通り、「寿量品の事の三大事」とは三大秘法のことです。

さて、テキストの『三大秘法抄』の御文については、このあと本門の本尊や本門の戒壇等について、色々と講義したいところではあるのですが、それらを述べていると時間を過ぎてしまいますので、本日はここまでで終了いたします。

いずれにいたしましても、今回、皆さん方が御登山せられ、信行学に励まれて功德を積まれました。この御本山に参詣し、御戒壇様にお目通りした功德を、あなた方一人だけに留めないで、その功德を多くの人に回してもらいたい、つまり折伏してもらいたいのです。一人でも多くの人を救っていくということが、今の本宗にとっては一番大事なことであります。

宗門は、平成三十三年・法華講員八十万人人体勢構築へ向かって前進をしておるわけですから、すべての法華講員一人ひとりが、この平成三十三年・法華講員八十万人人体勢構築のことをしっかりと胸に刻んで、その実現のために、御奉公に励んでいただきたいと思っております。

昨日と今日とで積んだ、この大きな功德を、どうぞ一人でも多くの人に伝えて、折伏に励んでくださることをお願いいたします、本日の講義といたします。